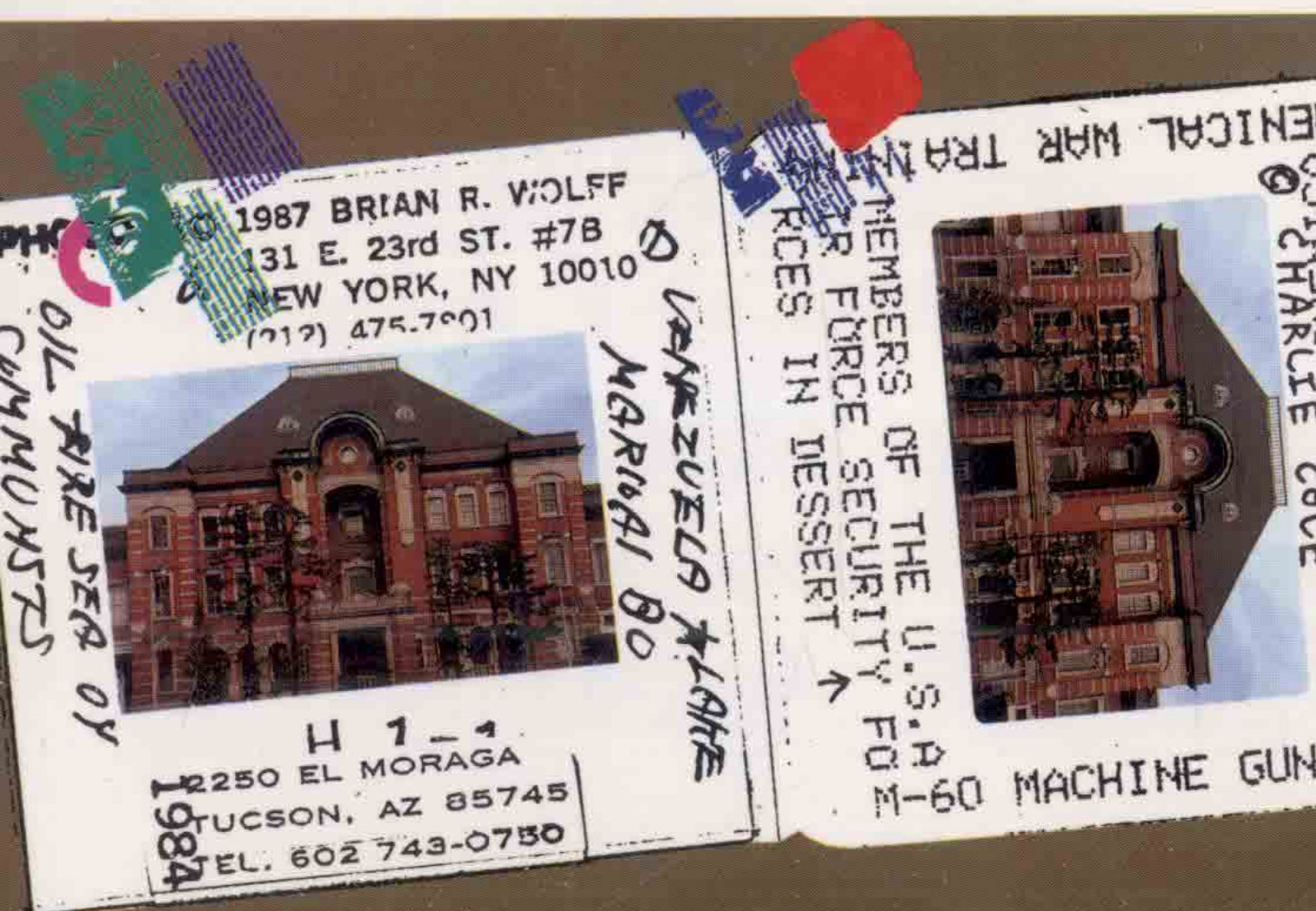


東京駅で消えた

Natsuki

夏樹静子

Shizuko



中公文庫



中公文庫

とうきょうえき き
東京駅で消えた

定価はカバーに表示してあります。

1991年 8月10日初版

1997年 5月30日再版

著者 なつ き しず こ
夏樹静子

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社 〒104 東京都中央区京橋 2-8-7 振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部)

©1991 CHUOKORON-SHA,INC. / Shizuko Natsuki

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-201823-4 C1193

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

東京駅で消えた

夏樹静子著

中央公論社

東京駅で消えた
目次

第一章	帰らぬ夫	9
第二章	閉鎖通路	35
第三章	7の扉	61
第四章	ステーションホテル	87
第五章	駅の記憶	114
第六章	地下ホーム	138
第七章	幻の女	163
第八章	二十四年後の事件	188

第九章 ツアーコンダクター

205

第十章 秘密部屋

232

第十一章 第七の通路

261

第十二章 生コン

283

第十三章 残る部分

308

第十四章 鍵

331

第十五章 静寂しじまの闇

351

解説

高樹のぶ子

381

東京駅で消えた

第一章 帰らぬ夫

1

「風が出てきたのかしら」

玄関のドアがガタンという音を聞いて、紀和子は独り言に呟いた。念のため茶の間の掛け時計を見あげたが、六時二分くらいをさして、夫の寛が帰宅するまでにはまだわずかばかり間がある。

それでも紀和子は、読んでいた雑誌をテーブルの脇に置いて立ちあがった。

十月もなかばになると、目に見えて日が短くなり、もうほとんど闇に包まれた庭先で、植木の黒い影が右や左に揺らいでいる。やはり強い風が吹き始めているようだ。

紀和子は縁側へ出て、ガラス戸にレースのカーテンを引き、それからキッチンへ入った。

もう一度、チラリと時計を見て、ガスのグリルとオーブンのスイッチをひねった。魚

やグラタンを火にかけるのは夫が帰ってからとしても、その前に内部を熱しておく必要がある。いや、グラタンは夫が家に着く前から温め始めても、ちょうどいいかもしれない。

それくらい、寛の帰宅時間は正確なのである。

今日彼は、東京駅を午後四時五十七分に発車する沼津行の湘南電車に乗ったはずで、それが茅ヶ崎へ着くのは五時五十八分。駅の改札口からこの家まで、男の足で約十五分かかるから、帰宅は六時十五分から十八分の間になるだろう。

今年ちょうど六十歳になる寛は、東京に本社のある大手総合建設会社・帝都建設の取締役土木工務部長をつとめている。技術的な仕事が多く、接待などはあまり縁のないポストなので、夜はめったに遅くならないが、ことに早朝の会議があった日は、その分退社が早くなった。四時半頃会社を出るなどというのは、一般サラリーマンには考えられないことかもしれないが、それだけでも寛は閑職なのである。

今朝も、土木本部長に午前八時から開く会議に立会ってほしいと頼まれたそうで、六時四十五分の上り電車に乗るため、六時半前に家を出た。

「帰りは沼津行の早いほうだ」と、出がけにいていた。それが四時五十七分東京発である。ふだんの帰りは五時十四分伊東行か、二十分平塚行を利用していた。

六時十分になると、紀和子はグラタンのキャセロールを、ほどよく温もったオーブン

の中に入れた。寛と紀和子と、娘の直子との三人分である。さっきまで離れでバイオリンの音が聞こえていたが、今は止んでいるから、直子ももうこちらへくるだろう。茶の間のテーブルに皿などを並べているうちに、六時十五分をすぎ、まもなく二十分になりかけた。

直子がキッチンに顔を出した。

「お父さま、まだ？」

「まだなのよ。でももうじきでしょ」

直子は今年の春、東京の私立音楽大学バイオリン科を卒業した。現在はバイオリンの個人教師で、週に二回東京へ通い、茅ヶ崎市内でも四カ所で教えているから、けっこう忙しい。茅ヶ崎は古くからひらけた海辺の別荘地だったが、高度成長期以後、東京から五十キロ圏内のベッドタウンとして急速に発展し、子供にバイオリンを習わせるような家庭も増えている様子だ。

もともと直子は身体が弱いので、紀和子もつい庇う気持が働いて、炊事の手伝いなどはあまりやらせない。寛などは、いまだに虚弱な少女を扱うような可愛がりようだった。食卓がすっかり調い、グラタンに焦げ目がついても、寛が帰宅する気配はなかった。

「おかしいわね」

「沼津行に乗り遅れたのかしら」

「するとつぎは、六時四分着の小田原行ね」

直子も父のタイムテーブルを宙で憶えている。それだと六時二十一、二分には家に着くはずなのだが、時計はもう六時半をまわろうとしている。

「電車が遅れてるのかもしれないわね。直ちゃん、お腹すいたんじゃない？」

「ううん、平気。それより書きかけの手紙があるから、お父さま帰ってらしたら呼んで」

直子はまた離れの自室へ引き返した。

七時をすぎると、紀和子はちよつと落着かない気持で、キッチンの壁に貼ってある東海道線時刻表を眺めた。

この時間帯には、五分から十分の間隔で、各駅停車の下り電車が何本も着いている。七時五分になっても声がしないところでは、六時四十六分着のにも乗っていなかつたわけだ。

つぎは六時五十七分着御殿場行。この電車は東京を五時五十四分に発車するが、こんなに遅くなることはめつたにないのだ。帝都建設の通常の勤務時間は午前八時半から午後五時までで、日本橋茅場町にある本社から東京駅までは、車で五、六分、ゆっくりみてもせいぜい十分だと聞いている。

また、何か急な用でもできた時には、必ず電話で知らせてくれる夫だった。

紀和子は廊下の角にある電話機へ歩み寄り、帝都建設土木工務部の直通電話をダイヤルした。

まもなく若い男の声が応えた。

「あの、曾根でございませうが。いつも主人がお世話になっております」

「ああ、どうもこちらこそ」

「恐れ入りますが、主人はまだそちらにおりますでしょうか」

「いや、もうお帰りになったと思いますが……ちよっとお待ちください」

居残っていた社員に確かめてくれたのか、しばらくたつて彼は電話口に戻ってきた。

「やはりもうお帰りになったようです」

「何時頃でしょうか」

「四時半すぎに部屋を出られたそうで……車のほうにも訊いてみましたが、四時四十分か五十分くらいに駅に向かわれたんじゃないかということでした。ただ、担当の運転手ももう帰ってまますので、はっきりした時間はわからないんですが」

「いえ、それならけっこうです。どうもありがとうございました」

電話を切りかけて、

「あの、谷岡さんはまだいらっしゃいますか」

「いえ、係長も外へ出ておりました、今日はもう会社へ戻らないと思ひますが」

「そうですか。どうも失礼いたしました」

今度は受話器を置いた。

四時四十分か五十分に東京駅へ向ったというなら、やはり四時五十七分発の沼津行に乗るつもりだったのではないだろうか。茅場町と東京駅の間は、朝夕会社の運転手が送り迎えしている。

会社を出がけに電話が掛って、急に誰かと会うことになり、家に知らせる間もなくそちらへ直行してしまったのか。それとも、東京駅でばったり友人に出会いでもして……？

そのまま九時近くまで、紀和子はキッチンへ立ったり、茶の間へ戻ってテレビをつけたりして待っていた。直子も一度様子を見にきてから、ご飯はまだいいと言って、また離れへひっこんでしまった。

東海道本線が事故か何かで遅れているということもありうる。

九時になると、紀和子はさつき直子にいったことを思い出して、再び受話器を取りあげた。

茅ヶ崎駅に掛けて尋ねてみたが、事故などはなく、電車は平常のダイヤで運行されているという返事だった。

「案外昭のところへ……？」

紀和子はまた独り言を呟いた。三十歳になる長男の昭が、結婚して杉並区久我山に住んでいる。商社勤務の彼は、今ニューヨークへ出張中のはずだが、マンションには嫁と一歳半の孫がいるから、ふいに孫の顔でも見たくなって……？

念のためにそちらへも電話してみた。

「あ、お姑さま、ご無沙汰してます」

嫁の薫の屈託のない声が受話器を伝わってきた。後ろに孫の声も聞こえている。

「お変りない？ 浩一も元気そうね」

「ええ、お蔭さまで」

「昭さんは、まだニューヨークなんですよ」

「はい。二十日に帰る予定ですから、あと六日ほど」

「今度はわりに長いのね」

「そうですね。三週間くらい……」

「たまには電話してくる？」

「ほんとにたまに。でもなんだかすごく忙しそうで、ちょっと浩一の声を聞いたただけで、すぐ切っちゃうんですよ」

「あら、そう。あの人も仕事熱心はけっこうだけど……」

紀和子は少し苦笑した。